

Think the Earth Paper

シンク ザ アース ペーパー

Think the Earth Paper vol.17
Autumn – Winter 2024

SDGs14 海の豊かさを守ろう

海に囲まれた国に暮らしているながら
私たちは海についてどれくらい知っているでしょうか？
いま海と人の関係は危機的な状況にあります。
でも同時に、海と人の新しい未来をつくる活動も生まれています。
今号ではSDGs for Schoolを通じて出会った
海の挑戦者たちをご紹介します。

海洋ごみが押し寄せる対馬で考える
「あおいほしのあおいうみ」を
守るためにできること

東北から日本の水産業を変えていく
フィッシャーマン・ジャパンの軌跡

SDGs for Schoolの活動より
新刊『あおいほしのあおいうみ』

イタリア・プロジェッティスタに学ぶ
「控えめな創造力」ほか

海洋ごみが押し寄せる対馬で考える 「あおいほしのあおいうみ」を 守るためにできること

四方を海に囲まれている日本は豊かな海の恵みに支えられてきました。

けれども今、海からは恵みではなくごみが大量に流れ着き、日本各地の海岸を悩ませています。

なかでもユニークな生態系を有することで知られる長崎県対馬は、「日本でいちばん海のごみが集まる島」と呼ばれるほど。

海ごみだけではなく、藻場が消失する磯焼けや漁業者の減少など、海をとりまく課題が対馬に凝縮しています。

海の未来を守るためにできることを探るために対馬を訪れ、漂着ごみの現場を訪れるとともに、

課題解決に取り組む人たちに話を聞きました。

取材・文：小泉淳子 写真：平川雄一郎

1年間に4万㎡のごみが海岸に流れ着く

九州最北端に位置する対馬は韓国・釜山まで直線距離でわずか50キロ。かつて大陸と地続きであったことから、大陸由来の固有種が息し、豊かな生態系を有する島として知られてきました。しかし今、対馬にはこんな呼び名がついています。

“日本でいちばん海のごみが集まる島”

対馬でいったい何が起きているのでしょうか。対馬の海が直面する問題を知ることは、海に囲まれ、海とともに暮らしを営んできた日本全体の未来を考えることにもつながる。そう考えて対馬に向かいました。

漂着ごみの「ホットスポット」と言われるクジカ浜に案内してくれたのは、対馬グリーン・ブルーツーリズム協会事務局長の川口幹子さんです。川口さんは大阪の衛生用品メーカー、サラヤ株式会社が海洋問題の解決に取り組むために設立した株式会社ブルーオーシャン対馬の代表も務めています。

車を降りて細い道を抜け海岸にたどり着くと、そこは想像を遥かに超えるごみで覆い尽くされていました。砂浜に広がるごみの山を前に、人はこの状況に何かできるのだろうか、途方にくれる心境になりました。

カラフルなポリタンク、発泡スチロール、ペットボトルに浮きや魚網などの漁具。ペッ

トボトルには、韓国語や中国語のほかベトナム語やインドネシア語などの表記も見られ、軽くて丈夫なペットボトルは波に乗って遠くまで運ばれることを実感させられます。砂浜に散らばるキラキラした破片は、貝殻ではなく、波や風にさらされて劣化したプラスチックごみでした。劣化したプラごみはマイクロプラスチックと化し、回収が困難になります。プラスチックごみが風に飛ばされたり、時化の波さわれたりして再び海に戻っていく再漂流も問題となっています。

地球規模の視点をもつ 人を育てる必要性

対馬市SDGs推進課の前田剛さんに対馬の海をとりまく状況について話を聞きました。

対馬に大量の海洋ごみが集まるのは日本海の入り口に位置していることが関係しています。海流に乗って流れてくるごみを、南北に長い海岸線のほとんどを占める複雑なリアス海岸が受け止めているのです。地球温暖化による異常気象で漁場が破壊され、韓国で海苔養殖に使っている漁具や中国で牡蠣養殖に使っているフロートなどが大量に流れてくることもあるそうです。「この島で起きている問題は、現在の、また明日の地球規模の環境問題の本質を先鋭的に表していると思います。ローカルの視点だけではなく、地球規模の視

点をもちながら行動していく人を育てていくことには解決しないのです」

対馬市では市の予算と国からの補助金を合わせて年間3億円近くを投じ、漂着ごみを回収・処理しています。しかし実際に回収できる量は5分の1ほど。取り残しがどんどん増えている状況です。しかも海中のごみの量は調査できておらず、ほとんどのごみは海底に沈んでいると考えられます。2050年には海洋に存在するプラスチックの総重量が海にいる魚の総重量を上回るという試算もあります。「プラスチックが誕生したことによって私たちの生活は便利になりましたが、利便性の裏側にあるのがこの光景なんです」と前田さん。

海で起きている問題というのは、経済や社会の仕組みも同時に考えないと解決できません。消費者が安いものを求めると、海外で違法操業が行われ、その漁具のごみが対馬に流れてくることもあると前田さんは指摘します。地球環境のことを考えた消費行動が求められることが、今そこにある危機として迫ってきています。

「国内の漁業の問題も海洋ごみに関係しています。資源量を管理せずに乱獲することで水揚げが減り、暮らしが成り立たないから漁師さんが減り、海を守る人がいなくなる。そして使われなくなった漁具がごみとなって流出してしまう。そんな悪循環が起きている」

対馬市では海洋ごみ問題について島内外の人々に関心をもってもらうための活動に力を入れており、プラスチック製品を作っている企業の意識変容を促すため、企業のスタディツアーも積極的に受け入れています。

漂着プラごみは劣化が激しく リサイクルに向いていない

では回収した漂着ごみは、その後どうなるのでしょうか。対馬グリーン・ブルーツーリズム協会の川口さんに、リサイクルの前処理を行う市直営の対馬クリーンセンター中部中継所を案内してもらいました。

回収したごみの一部はプラスチック製品の原材料として再利用するマテリアルリサイクルが行われ、買い物かごや歯ブラシなどに生まれ変わっています。でも、漂着ごみは劣化が激しくマテリアルリサイクルには向かないといいます。「ごみが海を漂っている間に塩分や重金属などの不純物が付着しますし、外来種の生物が入り込んでいることもあります。素材が多岐にわたり高度な分別が困難なうえ、紫外線による劣化も激しく、品質を保つのは難しいのです」と川口さん。漂着ごみを利用したリサイクル製品の話題性はあるものの、実際のリサイクル率は高くありません。

川口さんは、海洋プラスチックごみを使った製品を作ることが問題解決のように捉えられるのは、「非常にもやもやする」と言います。まずは海ごみにならないように啓発するべきというのが川口さんの考えです。

ごみになる前の 回収ルート確立が大事

「海洋ごみは宝の山ではありません。最終的な目標は脱プラスチック社会を作って、海洋ごみを出さないようにすることです。今やるべきことは、ごみになる前の回収ルートをつくって、効率的に再資源化し、新たな石油の採掘を減少させることだと考えています」

ブルーオーシャン対馬では、2025年4月に開幕する大阪・関西万博で海洋問題解決の事業モデルを発信することをめざしています。再資源化については、島から排出されるごみと漂着ごみを合わせて加圧・加温して加炭剤



鳥帽子岳展望所から眺めた浅茅湾の風景。古代からほとんど変わらない美しい山並みと穏やかな海の光景が広がっている



上) 対馬市役所SDGs推進課の前田剛さん。SDGs(持続可能な開発目標)の目標14「海の豊かさを守ろう」を軸とした持続可能な島づくりに取り組んでいる 下) スタディツアーを運営する一般社団法人対馬CAPPA代表理事の上野芳喜さん。シーカヤックの上では満面の笑みがこぼれる



上) 海岸に近づいてみると、大量の漂着ごみが砂浜を埋め尽くしていた。ポリタンクにペットボトル、パイといったプラスチックごみが3分の1を占める。外国の文字が書かれたごみも少なくない 左下) 回収された漂着ごみはいったんすべて中部中継所に集められる。右下) 対馬グリーン・ブルーツーリズム協会の川口幹子さんがごみで埋め尽くされた海岸を案内してくれた

という固形燃料にすることを検討中。この方法のメリットは、手間をかけて分別する必要がなく、燃えるものをすべて合わせて加工できることです。並行して漂着ごみを回収するための技術開発や、製品設計の段階でのイノベーションにも取り組む計画です。重要なのは対馬だけではなく、他の島嶼地域でも応用できるような持続可能なモデルを作ることだと川口さんは言います。

漂着ごみを自分ごととして考えるためのエコツアー

対馬を訪れ、漂着ごみ問題には気候変動や社会経済の問題が複雑に絡み合っていて、社会全体で対策を考える必要があることがよく分かりました。同時に一人ひとりの意識も重要であることを再認識しました。普段生活しているなかで、プラスチック削減の必要性を頭ではわかっていても、実感できていない人が多いかもしれません。でも漂着ごみを目の当たりにすれば、その考えは吹き飛ぶでしょう。自然界で分解できないプラスチックごみがいかに環境を破壊しているか。漂着ごみにならないよう、ごみをきちんと処分することがどれほど大切か。

漂着ごみ問題を意識するための学びに力を入れているのが、一般社団法人対馬CAPPAです。代表理事の上野芳喜さんは、2003年にシーカヤックのツアーを行う対馬エコツアーを設立。海の楽しさと対馬の魅力を伝えることに力を注いでいたため、当初漂着ごみは見せたくなかったとか。対馬自慢の美しい景色だけを見てほしい。そう考えていました。

でも、10年ほど前から漂着ごみを意識するようになったのだそう。ごみを拾いましょうかとツアー客に声をかけると、多くの人が大量にごみを拾ってくれたのです。日韓交流イベントに参加し、問題意識を共有する大切さに触れたことにも背中を押されました。

2017年に一般社団法人対馬CAPPAを設立。企業や学校向けにシーカヤック体験と環境問題の学びを組み合わせたスタディツアー

を行っているほか、市からの委託を受け、漂着ごみのモニタリング調査や海岸清掃、ワークショップなどを実施しています。

私たちがスタディツアーに参加することになりました。まずはレクチャーで対馬の特徴や魅力を学びます。遣隋使が対馬を通って海を渡ったことを知ると、対馬が一気に身近に感じられました。続いて、なぜ対馬に漂着ごみが集まるのか、回収がいかに難しいかについて丁寧な説明が行われました。

レクチャーが終わったら、シーカヤックで浅茅湾に繰り出します。遣隋使や国防のために配備された防人が見た頃からはほぼ変わらない景色を見られるとは、なんて贅沢なのでしょう。風景そのものは変わらないのに、海岸には大量の漂着ごみが・・・。「このギャップが心のどこかに残っていることが大事なんです」と上野さん。「この小さな自治体が困っているのだから、みんなで考えましょうということ伝えていきたい」

対馬には漂着ごみ問題のほかにも、海をめぐる課題が山積していました。そのひとつが磯焼け(藻場が消失して海が枯れてしまう状態)です。また、増えすぎたシカやイノシシが山を荒らす被害も深刻で、その影響が海にも及んでいました。海の未来を考えると暗澹たる気持ちになりますが、そうした状況はねのけようとアクティブに活動している人たちに出会うこともできました。

磯焼けを食べて解決！ そう介プロジェクト

磯焼け対策に取り組む丸徳水産の犬東ゆかりさんは、磯焼けの原因となっているイソズミやアイゴを美味しく調理することに成功し、漁業者の意識改革につなげました。

磯焼けは複数の要因が絡み合っていて起こるとされています。地球温暖化の影響で海藻が生育できる温度を超えて海水温が上昇し、海藻が衰弱することもそのひとつ。また、高い水温によってイソズミやアイゴ、ガンガゼ(ウニの一種)など海藻を食べる生物の活動が活

発化し、海藻を食べ尽くしているのです。

犬東さんが磯焼け問題に取り組むようになったのは、イソズミやアイゴが駆除された後に焼却処分される(当時)という話を聞き、燃やすなんてもったいない！と考えたのがきっかけです。強烈な磯臭さを放つイソズミやアイゴですが、なんとか美味しく食べられないかと試行錯誤が始まります。

「食べる磯焼け対策」が本格化したのは2019年。そう介プロジェクトと名付け、何度も試作をして生まれたのが、イソズミを使ったメンチカツとアイゴのフライです。血抜きの下処理を丁寧に行い、すり身にして野菜を加えることで臭みを取ることに成功。厄介ものだった魚が、食材として生まれ変わりました。

イソズミのメンチカツは2019年の「第7回Fish-1グランプリ 国産魚ファストフィッシュ商品コンテスト部門」でグランプリを受賞。「賞を取ったことで、何より漁業者たちの意識が変わりました。彼らにとってイソズミやアイゴは駆除の対象でした。でも、今では捕獲した漁師さんたちが鮮度を維持して持ち帰ってくれるようになりました。魚が取れなくなったと嘆くのではなく、取れる魚に付加価値を付けて、漁村にお金が落ちる仕組みをつくりたいと思っています」



上) 丸徳水産の犬東ゆかりさんが切り盛りする食事処「肴やえん」の前で。居心地のいい店は島の人たちの憩いの場となっている 下) 試行錯誤の末に完成したイソズミのメンチカツ(左)とアイゴのフライ(右)。今では「肴やえん」の人気メニューだ

イノシシやシカの捕獲を ポジティブな循環に変える

人とのつながりを大事にしている犬東さんが出会って意気投合した人物が、シカやイノシシによる被害対策に取り組む一般社団法人daidaiの齊藤ももこさんです。

現在日本各地で増えすぎたシカやイノシシによる農作物の被害が深刻になっており、対馬では人口2万7,000人に対し、4万7,000頭のシカが息を。獣医師の資格をもつ齊藤さんは、対馬野生生物保護センターのインターンに参加した時に、シカやイノシシに畑が荒らされて農家が困っていることを知りました。野生生物の保護が成り立つのは、人々の暮らしが守られてこそであると痛感。「人間の欲で壊してしまった生態系を改善し、それを人間が活用する。そんな架け橋になるような仕事がしたいと考えました」

数年後、齊藤さんは島おこし協働隊の一員として再び対馬にやってきました。「飛行機の中から見たらとても綺麗な森が広がって

るのに、一步山に踏み込むと目の高さより低いところの草木がほぼないという状況に衝撃を受けました」。シカは1日に3〜5キロの草を食べます。4万7,000頭が毎日この量を食べた結果、対馬の豊かな森林は失われ、荒れ果てていました。

人と野生動物とが共存できる社会をめざす齊藤さんは、シカやイノシシを獣害から資源に変えようと、2016年にdaidaiを設立。「第一に力を入れているのが捕獲による被害対策です。捕獲は私たちの暮らしを守り、山を守る仕事なのに、野蛮だとされる風潮があります。捕獲の意義と、捕獲を資源につなげて循環させるストーリーをきちんと伝えることで、価値を感じてもらえると考えています」

皮を資源として活用するための取り組みが、財布や名刺入れなどの革製品の製造です。丁寧に手作りされた色鮮やかな商品は、今では島の名産になっています。2024年6月には、捕獲したイノシシを食肉加工する工場と、加工した肉を販売する「対馬もみじぼたん」をオープンしました。捕獲から肉の販売までをdaidaiが一貫して手掛ける体制が整いました。シカやイノシシの肉を食べることで、海や山が当たり前を守られていくという暮らしの循環をめざしています。

森を守ることが、海を守ることにつながることを齊藤さんは改めて気づかせてくれました。森の栄養分が海に流れ、その栄養分をプランクトンや海藻が食べ、植物連鎖がつながることで海の豊かさが守られているのです。だから、森の保全を後回しにしてはいけないと齊藤さんは言います。そしてこう付け加えました。「海の人たちと山の人たちがつながって、少しずつ輪が広がり、対馬を超えて世界中に広がっていったら、もっと素敵な循環が生まれていくと思います」

今回出会った人たちに共通していたのは、漂着ごみや磯焼け、獣害という深刻な環境課題を前に、できることはあると考えるポジティブな姿勢と、周りを巻き込んでいく行動力でした。私たち一人ひとりができることはあると考えて行動すれば、きっと未来は変わる。そんな希望を感じさせてくれました。



上) 一般社団法人daidaiの齊藤ももこさん。対馬南部の厳原にあるギャラリーdaidaiには革製品の工房も併設されている 下) 山に入るとシカやイノシシが届く範囲から下の草木はすべて食い尽くされており、被害の深刻さがよく分かる

本稿はウェブマガジン「think」のコーナー「地球レポート」に2024年9月に前後編として掲載された記事を改訂したものです。<https://www.thinktheearth.net/think/2024/09/tsushima/>



東北から日本の水産業を変えていく フィッシャーマン・ジャパンの軌跡

世界三大漁場とされる三陸金華山沖。この三陸の海は、親潮と黒潮によってさまざまな魚がやってくる海洋資源が豊かな海域で、古くから漁業が盛んです。

養殖も行われ、ホタテやホヤ、牡蠣、ワカメ、コンブなどの産地でもあります。

しかしこの海や漁業は、2011年3月の東日本大震災によって、大きな被害を受けました。

さらに日本において水産業の人材不足が進み、海水温の上昇といった環境問題も表面化するなど、海は深刻な状態に陥っていました。

そんななかで、2014年に宮城県石巻市の若手漁師が中心となって立ち上げたのが「フィッシャーマン・ジャパン」です。

これまでの漁業のイメージをひっくり返す「新3K」、「カッコいい」「稼げる」「革新的」を理念に掲げ、未来の世代が憧れる水産業の形を目指して活動しています。

フィッシャーマン・ジャパンが発足して今年で10年。いま、どんなことに力を注いでいるのでしょうか。私たちは、宮城県石巻市に向かいました。

ワカメ漁師であり、フィッシャーマン・ジャパンの代表理事を務める阿部勝太さんに、漁師としての歩みや、現在の取り組み、課題について、話を聞きました。

文・鈴木ゆう子 写真・平井慶佑



東日本大震災後、漁師として 新しい仕組み作りに挑戦

仙台から仙石線に乗って石巻駅へ。石巻の市街地からさらに車で40分あまり走ると、石巻市北上町十三浜に到着します。名前の通り、海岸線に沿って十三の浜（集落）が点在している地域です。浜の漁港には漁船が並んでいます。

阿部勝太さんは、十三浜のワカメ漁師家系の3代目。サラリーマンを経て、24歳で地元に戻り、漁師を継ぎました。その約2年後に東日本大震災が起こります。「家も船も加工場、養殖場まで流されました。海も浜辺も瓦礫だらけ。漁ができるかお金がどれくらいかかるか、震災直後は想像もできませんでした。その秋までに立て直せば、養殖場にワカメやコンブの種を植えられます。でも秋までに間に合わなければ、もう1年延びて収入はなし。地域みんなで協力し、残った船や行政の大きな船に乗り込んで、必死で瓦礫を撤去しました」

震災による借金も抱えて大変ななか、漁師として生きていくことを決意した阿部さん。漁師の仕事を楽しく前向きにできるように、仕組みを変えようと模索が始まりました。

そこで「自分で獲ったものを自分たちで確

保し、ブランディングして販売をしよう」と、浜の漁師で協業し「漁業生産組合 浜人（はまんと）」を立ち上げます。ワカメやコンブを生産するだけでなく、加工・パッケージ化して販売店に出すまでの工程を担う形に変えました。加工や商品開発をしてスーパーや飲食店に販売し、生産、加工、販売・流通を行う、6次産業化です。稼げる仕組みを浜で作っていききました。

売り上げを伸ばそうと尽力しながら感じていたのは漁師の担い手となる「若い人の不足」でした。「漁師は若い世代が少なく、いまは現役でも15年先は引退する年齢の方が多く、就業者がさらに減ってしまいます。浜人で僕らが漁業を盛り上げていくためにも、海で働く人たちを守っていかねばいけません。当時は漁師の募集自体がほとんどなく、さらに風評被害もあったため、自分たちだけの力では漁業就業者を増やすことは難しいと感じました」

そもそも、日本の水産業の人手不足は深刻な状況で、担い手が減少していることは大きな課題でした。現在も減少を続け、令和3年（2021年）の漁業就業者数は、前年より4.7%少ない12万9千人です。そのうち4割近くを65歳以上が占め、高齢化も進んでいます。

「人の育成をなんとかしなければ——」
阿部さんは少しずつ動き出しました。

浜の規模から 広い視点で漁業を考える

震災の翌年から、阿部さんは漁師の傍ら、東京で開催されるセミナーや勉強会に通います。最初のころはどの会場に行っても、漁師は阿部さん一人。でも徐々に漁師の参加者が増えていったといいます。「セミナーなどで

ほかの漁師に会うと、『売れてる？』『育ってる？』などと、お互いの浜の現状を伝えあいました。話してみると、どこも抱えている課題は同じで、いち漁師では解決できない問題も共通していました」

大きな組織でなければできないこともあり、阿部さんはまず、目の前の仕事に集中し知見を増やしていきました。そして2014年、同じ志を持つ漁師や魚屋の13人の仲間で、「フィッシャーマン・ジャパン（以下、FJ）」を立ち上げたのです。

「当初は浜ごとの課題として考えていましたが、これって宮城だけじゃなくて、福島も岩手も一緒だね、と。なんなら被災3県を超えて、日本の漁業の問題だと気づきました」漁師の高齢化や後継者不足、過疎化など、水産業の抱える状況は共通していて深刻です。水産業を将来に残すために、阿部さんは日本の漁業を変えていこうという大きなビジョンを立てて、活動をするようになりました。「どうせやるんだったら、日本の水産業のためになることをしたい。震災で、僕は日本全国から支援も受けましたし、僕ら漁師の立場から返せるもの考えたとき、日本の課題解決につなげようと思ってきました」

FJは三陸の海から、水産業における“新3K＝カッコいい、稼げる、革新的”を実行するトップランナーになることを目指し、主に4つの事業を進めています。

水産業のしくみを変える

就業者数が大幅に減少している状況において、従来のやり方からの変革や水産業全体での新しい連携に挑戦。国内販路だけでは



十三浜の風景。この日は風が強かった

なく輸出への切り替えも取り組んでいる。

未来のフィッシャーマンを育てる
漁師だけではなく、水産業全体に興味関心を持つ人を「フィッシャーマン」として、未来に向かって水産業を変えていくための担い手を育成するプロジェクト。地元三陸だけではなく、全国に広げて活動している。

漁業の魅力を伝える

3K(きつい、汚い、危険)という印象を持たれがちな漁業において、魅力も伝えていくプロジェクト。アパレルブランドとのコラボを行うなど、さまざまな形で漁業の魅力を発信している。

これからの水産業を持続可能にする

海が環境が大きく変化している今、フィッシャーマン・ジャパンとして次世代に続く海を守るための取り組みを行なっている。持続可能な漁業を目指し、ASC/MSC認証の取得にも力を入れる。



上) 一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン代表理事の阿部勝太さん。家業のワカメ・コンブの養殖とフィッシャーマン・ジャパンの活動を続けてきた 下) 加工したワカメをパッケージし出荷する

未来のフィッシャーマンを育てる「TRITON PROJECT」

なかでも現在、FJが力を入れているのが、未来のフィッシャーマンを育てる「TRITON PROJECT (トリトンプロジェクト)」です。

漁師は家業として営まれることが多く、募集が公に出ることはあまりありません。漁師になるための情報や求人票も表に出てこないため、仕事内容も想像が付きにくいものです。たとえ漁師や水産業の仕事に興味を持ったとしても、「住むところがなさそう」「受け入れてくれる場所はあるのだろうか」「どこに相談していいかわからない」など、不安を感じる人もいたはず。そこで始動したのが「TRITON PROJECT」でした。

活動内容は、漁師になりたい人と漁師のマッチングや、シェアハウスの運営、漁師や水産事業者の求人のフォロー、就業後の住まいの提供やステップアップのための勉強会の開催など。未来のフィッシャーマンの育成に向けてさまざまな角度から取り組んでいます。若い人に水産業の魅力を知らってもらうために、子どもたちや中高生、大学生に向けた漁業体験や課外授業も行っています。

その活動拠点となっているのが、石巻駅近くの千石町にあるFJの事務所1階の「TRITON SENGOKU (トリトンセンゴ



左上) 地域住民や水産業にかかわる人たちが集まっている 左下) TRITON SENGOKUで出迎えてくださったFJの香川幹さん 右) 「TRITON SENGOKU」はFJの情報やグッズも充実

ク)」です。

ここでは、漁師に関心のある人と漁師が面談をしたり、スタッフが求人票や資料をもとに相談にのったり、新人漁師とベテラン漁師が集ったり、海と人をつなぐ場として活用されています。ときには高校生が地域学習で訪ねてくることもあるそうです。

FJが設立して10年。今は若手社員が中心となって、さまざまなプロジェクトを進めています。TRITON SENGOKUで、私たちを出迎えてくれた香川幹さんもそのひとり。FJに新卒でジョインし、広報・PRという立場で水産業の魅力を発信しています。

香川さんが特に力を入れているのは、地元の高校生向けの企画です。進路や将来の夢を考える高校生に向けて、水産業の魅力やどんな仕事があるかを伝え、体験や学習の場を提供しています。

そのひとつが「すぎょいバイト」というプロジェクト。地元の高校生に水産業の魅力を体験してもらうことを目的とした海の1日アルバイトで、石巻にしかない取り組みです。牡蠣養殖やホヤ養殖に関わる作業など、石巻を支える水産業に関わるメニューを用意し、働きながら現場を見学したり海産物を食べたり、水産業の魅力を体験できます。

若い世代にとって、体験や学習の場がいかにか貴重な機会かを知っているのは、香川さんご自身かもしれません。実は香川さんは大学4年生のときに、「大学生の間に漁師の仕事をしてみたい」と、東京から履歴書を持ってTRITON SENGOKUにやってきました。ちょうど居合わせた漁師さんとも話をしたところ、「まずは流通を知った方がいい」ということで、魚屋で働くことに。FJのシェアハウスで暮らしながら、次は漁協で働き、さらに漁師さんの船に乗って養殖を体験。大きな漁船で漁に出たり潜水士の資格を取ったり、さまざまな経験をしたのです。「漁師をはじめ色々な現場をみたことで、卒業後の進路としてひとつに決めきれなくて。担い手を育成するFJの活動にも興味をわいて、インターンを経てFJで働くことになりました」(香川さん)

大学時代に自ら水産業の世界に飛び込んだ香川さん。そのときの経験を活かし、未来のフィッシャーマンを育てる活動に力がこもります。香川さんをはじめとする若手の活躍は、地元の漁師や漁業関係者たちを活気づけてい



るそう。「ぼくらFJ設立当時のメンバーは、いまはどちらかというと裏方にまわり、若い香川のような社員が中心となって事業をすすめています」(阿部さん)

TRITON PROJECTは、行政とも連携しています。石巻市を皮切りに、北海道利尻島や気仙沼市、静岡県西伊豆町、三重県南伊勢町とともに、担い手育成事業に注力しています。行政や地域も巻き込みながら取り組みが広がっていくのは、やはり地元の漁師の協力が大きいと阿部さんは語ります。「課外授業や漁師体験、マッチングなどのFJの提案に対し、ベテランの漁師さんたちが『人を育てたい』と受け入れてくれました。これはとても嬉しかったですね。漁業に携わる人がこれ以上減らないでほしいし、浜も賑わってほしい。海は養殖や漁業が続けられる環境であってほしいし、水産業界全体が儲かってほしい。世代に関係なく、同じ思いを持って取り組んでいることが伝わったのだと思います」

刻々と変わる海と向かい合いながら

フィッシャーマンを増やしていくために、「石巻だけではなく、全国各地の浜にも働きかけていきたい」と阿部さんは語ります。「漁師や水産業を選択して、本人も周囲もハッピーに働けるように、責任を持って取り組んでいます」

阿部さんが仕事をする十三浜地区では、環境への配慮にも力を入れています。2022年にはワカメ、コンブの養殖業として国内で初めて「養殖のエコラベル」と呼ばれる国際認証「ASC」を取得しました。

近年は自然環境が急速に変化し、三陸の海では、海水温の上昇による影響も顕著になってきました。「今年は、低気圧の影響もあってかこれまで経験がないぐらい海は荒れています。海水温は去年の夏からずっと上がっていて、魚介類の漁獲に影響が出てこれまでのような養殖ができなくなっているのが現実です。特に今年の三陸は、ワカメやコンブ、海苔もダメですし、ホタテは成長せず、ホヤは全滅しました。牡蠣も例年のように

育っていません。海産物の価格は上がり、消費者のもとに届きにくくなっています。とても危機感を持っていて、海や漁業、海産物の生産への影響を少しでも食い止めたいです」

海水温の上昇が進み、漁獲量に大きな影響が出ていることを知り、ネガティブにならざるをえない気持ちになりました。そんななかで、阿部さんにとって「海」とはどのような存在なのか、最後に聞いてみました。「僕にとって海は、生きるための手段であり、モチベーションを高めてくれる存在です。海とともに生きていくために、まだまだ考えなければいけないし、解決のためのチャレンジを続けなければいけないことがたくさんあります。海で何を生み出して、どう稼いでいくか。これからも刻々と変わる海と向き合いながら、考え、仕事を続けていきます」

スーパーに行けば魚が売っていて、お店に行けば魚料理のメニューがあり気軽に食べることができず。漁業と縁遠い地で暮らしていると、いま海で何が起きているのか、水産業がどんな状況にあるのか、なかなか想像しにくいものです。でも、いつも食べている魚が食べられなくなる未来もあるかもしれません。

今回、FJの力強い取り組みに触れ、海や漁業の課題は決して他人ごとではないことを実感しました。ベテラン漁師も若い世代も一緒に取り組むFJのプロジェクト。石巻から日本の水産業を変えていく未来を応援しています。



本稿はウェブマガジン「think」のコーナー「地球レポート」に2024年9月に掲載された記事を改訂したものです。

<https://www.thinktheearth.net/think/2024/09/fj/>



ワカメ漁の様子。阿部さんが着用しているのは、アーバンリサーチとFJのコラボで作られたカップ(サロペットパンツ)だ



持続可能な未来をつくる楽しさを届けたい！ SDGs for Schoolの活動より

書籍

海のことを楽しく学べるビジュアルブックができました！ 『あおいほしのあおいうみ The blue oceans of a blue planet』

『未来を変える目標 SDGs アイデアブック』に続き、SDGs for Schoolの2冊目の本ができました。今回はSDGs14「海の豊かさを守ろう」を中心テーマに、誰もが海について楽しく学べるビジュアルブックです。タイトルは『あおいほしのあおいうみ』。Think the Earthのコンテンツはいつも、感覚や感性を刺激し、好奇心に火をつけ、学びへの意欲をもってもらうことを大切にしています。今回もイラストや写真などさまざまな表現方法で、海への好奇心を育む本ができました。絵本のようにでもあり、どこからでも気軽に読める雑誌のようにでもあり、それでいて本棚にずっと置いておきたい書籍でもある。子どもも大人も楽しく読める本になっています。

いろんな視点で海を探究しよう！

私たちは海に囲まれた国に暮らしながら、海のことをちゃんとわかっているのでしょうか。海が環境が危機的状況にあると言われるいまこそ、海のことをちゃんと知りたい！ そんな思いからこの本を作りました。読者が海への好奇心を上げてもらうため、広大な宇宙の話から、海の生物たちの生態、身近な食卓の話題や海に関わる仕事まで、海に関するたくさんの視点を楽しく美しいイラストや写真で表現しています。

個性あふれるイラストレーターが参加

谷川俊太郎さんの詩「うみ」と木内達朗さんのイラストとの素敵なコラボレーションがイントロダクションに。宇宙の話題も、海洋生物の話題も、最新の科学を背景にしながらも解説的な絵ではなく、参加イラストレーターそれぞれの持ち味を活かした親しみを感じられるイラストで構成しています。ぜひ絵本のようにめくって楽しんでください。

海の問題を現地取材でリアルに伝えます

海の問題のリアリティを伝えるために、グローバルな海洋環境問題の現場や現地取材による写真を活かしたレポートページもあります。本号でも紹介した対馬の活動やフィッシャーマン・ジャパンをはじめ、海の諸問題と向き合う方たちの挑戦を紹介しています。

専門家の視点も大切にしています

「専門家に聞いてみた！」というコーナーでは、JAXA宇宙航空研究開発機構の矢野 創さん、国立科学博物館の松浦啓一さん、コンサベーション・インターナショナル・ジャパン代表のジュール・アメリカさん、ブルーカーボンネットワークを立ち上げた環境ジャーナリストの枝廣淳子さん、みなとラボ代表で東京大学海洋教育センターの田口康大さん、5名の方にインタビューをさせていただき、楽しいレイアウトのページにまとめました。

持続可能な開発目標 (SDGs) の14番目のゴールをきっかけに「国連海洋科学の10年」も始まって、いま世界中で海を大切にする動きが加速しています。課題を知ること大事ですが、この本を手にとっていただくことで、さらに海のことを知りたくなる、海に行きたくなる！ そんな気持ちが芽生えてくれれば嬉しいですし、海と人が共生する未来について思いを馳せ、新たな行動が生まれるきっかけになればと願っています。

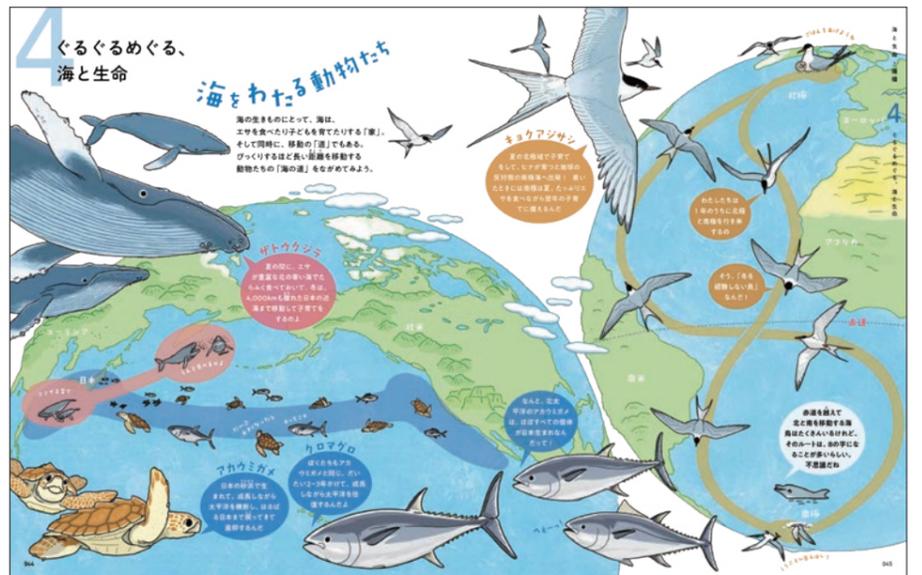


判型 B5変型版 フルカラー 132頁
 企画 公益財団法人ブルーオーシャンファンデーション
 特定非営利活動法人ZERI JAPAN
 編著 一般社団法人Think the Earth
 発売 紀伊國屋書店
 監修 縣 秀彦 (国立天文台)
 大河内直彦 (海洋研究開発機構) ほか
 用紙 すべての紙にFSC® 認証紙を使用しています
 価格 1,980円 (税込)

本の購入はこちらから！

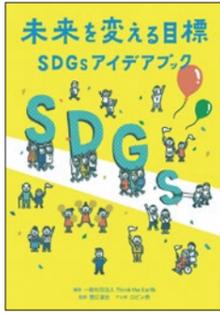
Amazon.co.jp

紀伊國屋書店
ウェブストア



寄贈プロジェクト

教育現場でサステナビリティ教育にポジティブに取り組む先生や生徒を応援するために1校につき1クラス分40冊の教材を贈る活動を続けています。これまで書籍『未来を変える目標 SDGs アイデアブック』を1,000校に、冊子『ターゲットと指標』を600校に届けました。今年からは『あおいほしのあおうみ』が新教材となります。まずは2024年秋に100校に贈り、2025年春にも公募予定です。



超文化祭

先生と生徒のアイデアから生まれた超文化祭。これまでに5回開催することができました。学校を超え、世代を超え、セクターを超えて、大人と子どもと一緒にアイデアを出し合いながら、これまでにない新しい文化祭を作りだしています。発表を聞いた参加者の投票数によって、文化祭の入場料収入を中高生の活動に寄付する仕組みも大きな特徴です。

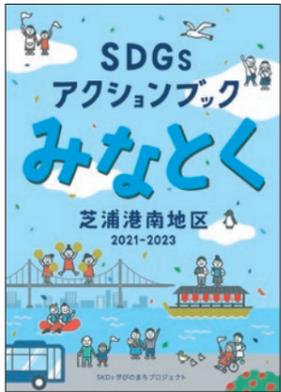


第五回超文化祭の様子@新渡戸文化学園

企業や地域と学校をつなぐ

教科書に載っていない最新の学びを企業と教員と一緒に開発したり、地域のSDGs活動を生徒たちが取材して発信したりするなど、学校と社会をつないで新しい価値を作り出す活動も積極的に行っています。

「SDGsアクションブック みなとく芝浦港南地区」 (東京都港区/野村不動産ほか)



高校生が地域の企業や団体取材して執筆まで担当しました

「人生100年時代の オーラルケア」 (ライオン)



10代からの口腔ケアの重要性を伝える教材を保健の教員とともに開発

「いのちをつなぐ学校」 (サラヤ)



生物学者の福岡伸一さんを校長に迎え、衛生・環境・健康をテーマに動画教材を提供。出張授業やスタディツアーも実施しています
<https://connecting-lives-school.jp>

ウェブサイト



ほかにもティーチャーズ・ギャザリングや認定エドゥケーター講座など学びを深める参加型の企画も盛りだくさん。ウェブサイトやメールニュースで情報発信しています。



ミニ・レポート

イタリア教員研修「プロジェクトスタに学ぶ控えめな創造力」

2024年3月、イタリアに住む批評家・アーティストである多木陽介さんが案内役となり、イタリアに残る「控えめな創造力」の実践者を、教員や教育に関わる参加者のみなさんと一緒に訪ねました。

まだ「デザイン」という言葉が普及する前のイタリアでは、デザイナーのことを「プロジェクトスタ」と呼んでいました。「プロジェクトツォーネ」は「プロジェクトを考えて実践すること」という意味で、プロジェクトスタはその実践者を指します。代表的なプロジェクトスタの名前を聞くと、ブルーノ・ムナリーやアキッレ・カステリオーニなどイタリアのデザイン界の巨匠たちが並びます。

多木さんは彼らのものづくりの根底には「控えめな創造力」があると言います。例えば、結果ではなく過程を重視すること、話すよりも聴く姿勢を大切にすること、デザインの対象となる素材や要素の良さを引き出し「育てよう」とすること、など教育者が共感する視点がたくさんあります。

今回の旅では5人の「プロジェクトスタ」たちに出会いましたが、そのうちの一人がブルーノ・ムナリー氏の直弟子で創造的教育法「ムナリー・メソッド」の伝承者

であるシルヴァーナ・スペラーティさんです。会場の教育農場に着くとチャオ！と満面の笑顔で出迎えてくれました。

シルヴァーナさんは参加者がいい状態であることをとても大切にしている、プログラム内容、空間作り、ファシリテーション、すべてを参加者の状態に合わせてその場で設計していく方でした。驚いたことは、参加者を観察してから何をするか決めるため、直前までどんなプログラムになるか誰もわからないこと。対話しながら、ベストな方法を模索する。相当の経験と技術がないと難しいことです。でも、そんな素振りはずっと見せずに温かいお茶と甘い焼き菓子を食べながら雑談し、ゆるやかに講義とワークショップが始まります。

その一つが「記号のワークショップ」。ペンやクレヨン、筆などさまざまな道具を

使ってたくさんの線を書き、それを分類します。使える色は黒だけです。すごくシンプルなワークですが、そこには多くの学びが隠されていました。例えば、線の引き方ひとつでも、優しく、力をいれる、速度を変える、など書き方を変えるだけで、多様な線のバリエーションが生まれます。それを分類・整理することで、線への解像度が高まります。その状態で世界を見ると、今まで目に入らなかった線がまちのいたるところに溢れていました。

翌日に行われたのは草花の絵を描くワーク「原っぱのラボラトリー」。解像度が高くなっている私たちには、草花を構成する線がありありと見えてきます。筆の使い方を工夫して、その線を描くだけで、さまざまな草花の姿が浮かび上がってくるのです！最後には、参加者全員が創造力を発揮した

作品を生み出して感動しました。

たった2日間の体験でしたが、世界を見る解像度が上がり、新しい学びの扉がひらいたような感覚でした。創造力と聞くと特別な能力のように思いがちですが、本来は誰もがもっていて、自分なりに育てられることを教えてくれました。

日本に戻ってからも参加者による自発的な勉強会や、日本各地へのフィールドワークを通じて「控えめな創造力」の探究を続けています。ぜひ、みなさんもこの学びの輪に加わりませんか？（笹尾実和子）

5人のプロジェクトスタについて紹介した旅の詳細レポートはウェブサイトへ！



多木さん

シルヴァーナさん



左) あたたかい日差しがふりそく庭でのワークショップ。適度な休息と参加者にとって常に気持ちいい空間づくりが徹底されていた
右) どれだけたくさんの線を生み出せるか、考え、手を動かす中で、線のバリエーションや多様性に気づいていく



抜粋版

Think the Earthのウェブメディア thinkの地球ニュースでは、世界各地のリポーターが気になったニュースや
 オススメ情報を随時発信。その中から最近アップされた記事の一部を紹介しします。ニュース全文はウェブでどうぞ！
<http://www.thinktheearth.net/think/news/>



未来を生きる子どもたちに必要な「力」とは 仲川美穂子

2022年のOECD生徒の学習到達度調査(PISA)実施結果が2023年12月に発表されました。PISAが重視するのは、テストスコアだけではなく、学びの動機づけや学びに対する姿勢です。
 「今回の調査の中心分野であった数学的リテラシーには、方程式を解くだけでなく、体系的な問題解決能力も含まれます。学びに関する共通指標を設定して、教育の成果をPISAで見える化し、各国が教育政策の議論を進めることが大切です」とOECDの教育スキル局

就学前学校教育課でPISAを担当する小原ベルファリゆりさん。ユネスコ教育計画研究所技術協力部の水野谷優さんは、「PISAは低所得国にも門戸を開き、世界81カ国・地域というカバー率。統計学上、この規模と精度のある国際学力テストは他にない」と言います。
 PISAは参加国の教育制度が異なるからこそ、他国が導入した試みや成果から学び、子どもの教育改善につなげられる世界の多様性を活かした仕組みといえます。



フランス発インクルーシブなカフェがNYに ささと

カフェ・ジョワイユはフランスのブルターニュ地方レンヌで2017年に最初の店をオープン。今ではヨーロッパ中の都市で20数店舗に増え、180人以上のダウン症や発達障がいをもつ人が働いています。そしてついに2024年3月、ニューヨークにアメリカ1号店が開店しました。
 運営は非営利団体ですが、障がい者が正社員で雇用され、レジや接客の仕事任せられ、サポートする健常者と分け隔てなく働ける場になっています。そしてカフェの利益はすべて障がい

者の雇用や職業訓練に再投資されます。
 NY店は黄色を基調としたポップなデザインで、障がいのある人が働きやすいように工夫されていて、働く人にも利用する人にも親しみやすく居心地のいい空間になっています。
 カフェ・ジョワイユ(Café Joyeux)のJoyeuxはフランス語で「喜び」を意味します。喜びとインクルージョン精神にあふれるカフェ。日本にもインクルージョンを実現したお店があります。みなさんの街で見つけたら、足を運んでみてはいかがでしょうか。



小さな島国が考えた海を守る方法とは？ 岩井光子

ニウエという太平洋の島国を知っていますか？ 陸地面積に対して領海は1200倍。海の恵みを持続可能な形で管理し、開発するためにニウエは知恵を絞ってきました。
 NGOトフィア・ニウエは2015年、政府とNOWプロジェクトを開始。政府は2017年、領海と排他的経済水域の40%に当たる12万7,000km²を海洋保護区に指定。小さな島国が100%自国の海洋空間を守ると宣言し、世界の島しょ国を驚かせました。
 海を守るためには、財源を安定させる必要

もあります。NOWは、国際NGOコンサベーション・インターナショナルとのタッグで、OCCs(海洋保護活動)の斬新な資金調達方法NOWトラストを発案しました。ニウエの海域1km²を20年間保護できる費用を見積もり、148ドル(約2万2,000円)を1ユニットに設定。これを海洋保護区の全域分に相当する12万7,000ユニット用意しました。集まった資金は海の保全活動や沿岸管理計画、ブルー・エコノミーの発展などにも活用されるそうです。



スキー場はサステナビリティで選ぶ時代 山本尚毅

世界がネットゼロを目指すなか、スキー場にも脱炭素やサステナブル化を取り入れる動きが登場しています。一般社団法人Protect Our Winters Japan(POW JAPAN)ではSUSTAINABLE RESORT ALLIANCEというプラットフォームを運営し、脱炭素化やサステナブル化を目指すスキー場のネットワークとその実現をサポートしています。
 2022年にPOW JAPANがスキーヤー・スノーボーダーを対象とした気候変動意識調査では、90%以上が気候変動対策を含むサ

ステナブルな取り組みを実践するスキー場を支持しているという結果になりました。代表理事の小松吾郎氏によると、欧米では、スキー場を選ぶ際にサステナビリティは重要な基準になっているそうです。
 POW JAPANがパートナーシップを結ぶエイブル白馬五竜スキー場では、2020年に再生可能エネルギー100%のナイター営業を運営開始。2023年には運営施設全体の電力をオールシーズン100%再生可能エネルギーへと切り替えています。

Information

プラネタリウム作品が教育機関向けDVDになりました

生物多様性と水をテーマに制作したプラネタリウム向け映像作品「いきものがたり」「みずものがたり」が、図書館・教育機関限定でDVDの購入が可能になりました。ぜひ授業等でご活用ください。



教材の無料ダウンロードができます！

SDGs for Schoolの活動を通じて企業や自治体、大学等と連携により、冊子や映像などの教材が次々に誕生しています。無料でダウンロードできる教材もありますのでアクセスしてみてください。



情報発信とコミュニティ

個人会員、メールニュース、SNS などさまざまな入り口でご参加をお待ちしています！



Think the Earth

www.ThinktheEarth.net/jp



一般社団法人Think the Earthは「エコロジーとエコノミーの共存」をテーマに2001年に発足したNPO(非営利団体)です。クリエイティブやコミュニケーションの力で、日常生活のなかで地球や世界との関わりについて考え、行動する、きっかけづくりを行っています。
 環境や社会問題への無関心とあきらめの心こそ最大の課題ととらえ、ウェブサイトや書籍などで情報発信を行っているほか、企業やNPO、教育者、クリエイターとともに誰もが参加できるプロジェクトを開発・提供しています。

2024年度パートナー企業(2024.10.31現在 五十音順)

- Think the Earthの活動は以下の企業の協賛・協力により推進しています。
- | | | |
|-------------------|---------------------|-------------|
| アクティオ株式会社 | 不二製油グループ本社株式会社 | LINEヤフー株式会社 |
| サラヤ株式会社 | Meiji Seikaファルマ株式会社 | ライオン株式会社 |
| 野村不動産ホールディングス株式会社 | 株式会社横浜銀行 | 株式会社LIXIL |
| 野村ホールディングス株式会社 | | |

発行●一般社団法人Think the Earth
 発行日●2024年11月5日

編集●上田壮一 岩井光子 笹尾実和子 制作●重松直子
 デザイン●武田英志(hoop) 印刷●瞬報社写真印刷株式会社

Think the Earth Paper PDF版(カラー)

バックナンバーも下記ウェブサイトにて閲覧できます。
<http://www.thinktheearth.net/jp/ttepaper/>

